様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１１日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　２００６～２００８
課題番号：　１８５３０６８７
研究課題名（和文）　働く人間への共感的理解による職業観、勤労観の育成をめざす社会科学習の基礎研究
研究課題名（英文）　Fundamental research in social studies to promote viewpoints toward the workplace based on a sympathetic understanding of the working people.

研究代表者
大澤　克美（OSAWA　KATSUMI）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：２０３２３７３５

研究成果の概要：実地調査を通して、秀でた生産活動や先見性に富む経営を行う人物の実相に迫ることから、活発な経済活動とそれを担う人間の働きを教材論的観点から具体的に明らかにし、小中の社会科学習指導要領を踏まえて、教材化の視点例とそれに基づく学習モデルを提案した。また、小学校の工業学習を例に、子どもの仕事認識と先行研究の考察を踏まえ、工業学習の新構想を提案すると共に、東京学芸大学附属小金井中学校と同附属小金井小学校にて働く人間への共感的理解に関する検証授業を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	480,000	3,080,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：　教育学・教科教育学
キーワード：　教育学、社会科教育、職業観、勤労観、共感的理解

１．研究開始当初の背景

本研究を含む研究全体の構想は、フリーターやニートの増加という社会の現実を踏まえ、社会科を中核とした学校教育におけるより確かな仕事認識の育成を通して、職業観及び勤労観の形成を図ることの必要性に基づくものであった。

そこには、平成16・17年度科学研究費補助金・基盤研究(C)（「現代の『職人』に着目した社会科学習における新たな職業観、職業意識の育成」・課題番号16530566）の成果とも関連して、ともすると産業の理解になりがちな小学校産業学習や、経済用

語の理解になりがちな中学校経済学習の改善、さらにはキャリア教育を担うことの多い総合的な学習の時間の効果的活用を図っていかなければならないという課題意識があった。

この課題意識の具体的な背景としては、
(1)日本労働研究機構（現日本労働政策研究・研修機構）の調査（「中学生・高校生の職業認知」資料シリーズ・2001・№112、「小学生の職業意識とキャリアガイダンス」資料シリーズ・2003・№138）
(2)上記の「現代の『職人』に着目した社会科学習における新たな職業観、職業意識の育成」で実施した約3000人の小・中学生の調査
(3)平成13年度及び15年度に実施された『教育課程実施状況調査』の「児童生徒質問紙社会」
による一連のデータが、少なくとも現行の社会科をはじめとする学校教育が、仕事認識はもとより職業観や勤労観などの育成にあまり寄与していないことを示していたことが挙げられる。

２．研究の目的

上記の調査結果を受けて、これまでの社会科教育の現実を振り返ると、取り上げてきた労働としての仕事に関する客観的な事実や社会的な意義の追究に留まり、仕事経験を持たない子どもたちと職業としての仕事とを結びつけ、その意味を感じさせたり、個々の生き方との関わりを意識させたりするための機会を十分保証してこなかったことがわかる。

先の調査結果は、職業労働に対して職業的側面及び個人的側面からアプローチする機会が無かったことに起因するものと推察される。ここでいう機会とは、目的と意欲を持って働く人間との出会いやその人間の生き方に対する共感的な理解と言い換えることができる。この点で、生き甲斐を感じながら仕事に取り組む魅力的な人物をいかに見出し、授業でどのように取り上げていくかが、社会科における仕事認識育成に関する大きな課題になっているといえよう。

本研究は、既に述べた子どもの状況と学習指導上の課題に着目し、産業や経済についての理解と共に、悩み等を乗り越え仕事で自己実現を果たしている人間の理解をも可能にする社会科授業の実現をめざし、参考事例の収集・提示とその教材化、さらには試行的な授業による子どもの認識変容について基礎的な考察を行うことを目的とするものである。

３．研究の方法

３年に渡る今回の研究では、職業としての仕事の個人的側面を重視して仕事認識の育成を図る授業の一般化をめざし、以下のような作業課題を設定して研究を進めた。

(1) 教材のモデルとなるような各地の特色ある事例について、子どもがネガティブに捉えがちな第1次、第2次産業（農業・林業、工業）を中心に実地調査を行い、情報を収集・整理する。

(2) 事例を教材化していく際の、視点を目標設定との関わりから明らかにする。

(3) 視点については、特に産業や経済活動の理解と適切な人物を通した仕事の理解をいかに関連づけていくかを中心に検討を進め、教材作成時に参考となるよう類型化・一般化を試みる。

(4) 幾つかの事例を取り上げて、教材を開発し、授業を試みる際のサンプルとなるよう単元モデルを提示する。

(5) 調査事例及び教材化の検討に基づく試行的な授業を行い、子どもの働く人間への理解や職業観の育成の様相を明らかにする。

４．研究成果

研究成果の詳細は、　「５」に記載した研究成果報告書に掲載した。

(1)実地調査に関わる成果

①本研究の目的に基づく実地調査の一般的な方法を明らかにした。

②本研究の教材として価値ある日本各地の事例を、その特色、教材化の方向性を含めて提示した。

③実地調査の内容を蓄積・検討することを通して、調査及び教材化に当たって重要な働く人間への共感的理解を育むための着目点を例示した。

「着目点の参考例」

○働くことの意味に関連して

・仕事への情熱や未知の世界への好奇心　・夢やものを形にしていく楽しさ　・作業の方法や設備、道具を改良する面白さ　・難しい課題に対するチャレンジ精神や緊張感　・開発や問題解決など個人やグループ、組織で設定した課題の達成感　・仕事仲間と協働して働くことの満足感　・技術や技能の向上に対する充実感　・自己の技術や技能、理念に対する自信と自尊心　・仕事に対する誇り　・努力が報われる喜び(売り上げ、報酬、役職、社会からの理解・指示の広がり等)

○働くことの意義に関連して

・顧客満足への貢献　・顧客や地域社会からの信頼獲得　・経済、社会、環境への貢献や奉仕　・職責の着実な遂行　・社会的連携への貢献　・製品及び生産技術の開発や生産性向上、自然保護や雇用創出への貢献

○苦労や悩みに関連して

・損失や被害を出すような失敗に対する後悔　・求められた課題に対する無力感や焦燥感　・仕事における目標やゆとりの喪失感　・仕事の意味や自己の役割に対する理解の欠落　・結果に対する評価の厳密化と期間短縮化　・顧客ニーズの急激な変化に対する不安　・仕事に関わる政策など行政の在り方、進め方に対する不満や不安　・自らの仕事に対する社会的偏見　・職場環境の厳しさ(ノルマ、待遇、福利厚生等)

(2)教材化の視点と単元モデルに関わる成果

①小学校及び中学校の学習指導要領との関連を踏まえて、事例の教材化を進める際の視点を提示し、一般化の手立てを示した。

「一般化を意図した手立ての一例」

「小学校の産業学習における『知識・理解の目標例』」

＊△△は製品名、●●は人物名である。実際の目標設定に当たっては、教材により選択や集約が行われることになる。

A △△の生産を調べることを通して、会社（工場）が安くて質のよい製品を害を出さず速くつくるために設備の自動化や生産管理方式の改善などを行っていることを理解する。

B △△の生産を調べることを通して、働く人たちが安くて質のよい製品を害を出さず速くつくったり、できた製品を安全かつ予定どおりに届けたりするために、工夫や努力していることを理解する。

C △△の生産を調べることを通して、工場で働く●●さんは新たな課題に挑戦したり改善の工夫をしたりする中で技術・技能を向上させ、達成感や誇りなどの働き甲斐を感じながら責任を持って仕事に取り組んでいることを理解する。

D △△の輸送を調べることを通して、原材料や製品を運ぶ●●さんは納品の予定を守ったり安全性を高めたりする中で、達成感や誇りなどの働き甲斐を感じながら責任を持って仕事に取り組んでいることを理解する。

E △△の生産活動を通して自分たちの生活や社会が、工場で働く人々の仕事よって、またできた製品を輸送する人々の仕事によって支えられていることを理解する。

②小学校産業学習及び中学校経済学習において、調査事例から教材化の視点に基づく単元モデルを提示した。

「単元モデルの一例」

「ナカシマプロペラ（岡山県倉敷市）をたずねて」

（小学校５年社会科・９時間扱い）

単元の目標（関心・意欲・態度及び観察・資料活用の技能・表現については省略）

◎知識・理解の目標（評価の観点）

＊アルファベットは、先に示した「知識・理解の目標例」との関連を示すものである。

A プロペラの生産を調べることを通して、ナカシマプロペラが質のよい製品を環境に配慮して速くつくるために、設備の自動化や再資源化、防塵などの環境対策などを行っていることを理解する。

B プロペラの生産を調べることを通して、働く人たちが質のよい製品を丁寧に速くつくったり、できた製品を安全かつ予定どおりに届けたりするために、工夫や努力していることを理解する。

C プロペラの開発と生産を調べることを通して、工場で働く河合さんや設計を担当する花岡さんが新たな課題に挑戦したり、問題点の改善をしたりする中で技術・技能を向上させ、達成感や誇りなどの働き甲斐を感じながら、責任を持って仕事に取り組んでいることを理解する。

E 私たちの使うものを運ぶ船舶になくてはならない部品であるプロペラの生産活動を通して、自分たちの生活や社会が、工場で生産に携わる人々の仕事によって、またできた製品を輸送する人々の仕事によって支えられていることを理解する。

○プロペラの材料の多くが輸入されていることや、つくられた製品が外国に輸出され世界各国の船で使われていることを理解する。

◎思考・判断の目標（評価の観点）

○会社であるナカシマプロペラやそこで働く人々の努力や工夫の目的、あるいは意味について考える。

○河合氏や花岡氏の仕事に対する取り組み方や想いを聞いて、働くことの意味について考える。

○プロペラ生産の仕事が、どのように私たちの生活や社会に役立っているのかを考える。

学習指導計画

１時　ナカシマプロペラのパンフレットやＶＴＲからプロペラの働きを知り、巨大でありながら正確さを求められる製品の生産方法、生産に従事する人の工夫や努力などに関わる疑問を発表し合い、これから調べたいことを整理する。

２時　資料でプロペラが開発・製造されるまでの過程を調べ、顧客の多様なニーズに応える速くて確かなものづくりをめざした製造設備の自動化や働く人々の工夫や努力の様子、次の工場見学で調べたいことなどをまとめる。

３～４時　玉島工場を見学して、プロペラを受注してから納品されるまでの各過程を確認し、働く人々から生産活動に関する工夫や努力を聞き取り、記録する。

５～６時　見学の記録を基に、会社や働く人々が環境対策も含めて、どのような工夫や努力をしているのかを整理し、その理由と共にまとめる。

７時　河合氏あるいは花岡氏を学校に招いて、プロペラづくりにおける自ら

仕事への想いや仕事に対するこれまでの取り組み方を聞き、働くことの意味や意義、仕事の大変さについて話し合う。(招聘が難しい場合は、見学時にこの時間を確保する)

８時　原材料がどこから来ているか、製品がどこへどのように運ばれていくかについても、地図等に整理しまとめる。また、プロペラが造船所で取り付けられ、船が完成して就航するまでの様子や船舶輸送の現実を資料で調べる。

９時　プロペラづくりの仕事が、自分たちの生活とどのように関わっているかを話し合った後、これまでの学習についての振り返りを行う。

(3)小学校産業学習に焦点化した仕事認識育成についての詳細な検討に関わる成果

①社会科における仕事認識の現実を踏まえて、その問題と改善点を指摘した。

②子どもの仕事認識の現状を各種の調査結果を基に総合的に考察し、その特徴を明らかにした。

③工業学習を事例として、仕事認識の育成に関わる先行研究、先行実践の成果と課題を指摘した。

④本研究の成果に基づいて、工業学習の新構想を提案した。

上記の主な研究成果について、日本社会科教育学会の『社会科教育研究』（学会誌）に発表した。

(4)試行的な研究授業の実施に関わる成果

①中学２年生の選択社会及び、同３年生の公民的分野において、実地調査の内容に基づき共感的理解の対象となる人物をゲストティーチャーとした研究授業を実施した。

②小学５年生の特設授業において、「働く人間への共感的理解を育むための着目点」を活用した学習指導案を作成し、ゲストティーチャーとの授業を実施した。

③中学校及び小学校における授業感想を分析・考察し、本研究に依拠した授業が職業観や勤労観の育成にどのように関わっているかを明らかにした。

「中学校における授業感想」

「仕事への共感、仕事の意味・意義の理解、働き甲斐の感取」に分類されたものの一部を紹介する。

〇３年D組〇番

「コラボ」で作られた製品を見て、見た目はシンプルだけれども、製品の裏には消費者（特にハンディキャップを持つ方々）の苦悩や作り手の研究、願望が感じられました。

授業の中で取り上げられた“つながった箸”（？）を見たとき、僕は小学校の頃、学芸大学でハンディキャップを持つ方々のための生活用品（食器や文房具など）を集めた展覧会に行ったことを思い出しました。ここにはまさにこの箸があり、世の中にはこのようなものがあるのだと感心したのをよく覚えています。あれから数年、少しは世間に対する視野が広がった今となっては、生産者や消費者のことも考えるようになり、社会は支えられる立場にある人を支える立場にある人が支えることによって成り立っているのだと感じました。支える立場にある人はいても、支えようとする人はなかなかいません。僕自身、ボーイスカウトで活動していても、「誰かのために尽くそう」と本気で思っている人はあまり見られません。

しかし、「コラボ」のように、誰かのために尽くそうと一生を懸けることはすごいと思いました。僕も見習わなければならないと強く感じました。50分の貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

〇3年D組〇番

実は、私の曾祖母が新潟に住んでいました。曾祖母は手足を悪くしていたので、も

っと早くこのお話を聞いて、食器をプレゼントしてあげたかったなぁと思いました。最近、祖母から「飲み物飲むときむせちゃうのよねー」という相談を受けていました。私も気管支が弱い方で、「そういうものがあったらいいなぁ…」とずっと思っていたので、今日こういうお話を聞けてすごくよかったです！

でも、今日一番驚いたのは、あの使いやすいお箸が外国人にもウケている、ということです。「結果的に色々な人に使いやすいものになった」と社長さんはおっしゃっていましたが、それは素晴らしいことだと思いました！私も将来他の人に役立つ仕事に就きたいと思っているので、とてもためになりました。

近頃、日本の伝統工業が少しずつすたれてきているという話をよく聞きます。そんな中で、大手の工場と手を組むのではなく、地元に密着した事業を進める、という姿勢に感動しました。今日は本当にありがとうございました！！

〇3年D組〇番

秋元さんのお話は普段なかなか聞けないもので、しかしとても身近なお話でとても興味深いものだと思いました。特に、形状変形ポリマーという素材がとてもおもしろかったです。とても簡単に変形できて使いやすいものだと思いました。たった７人の会社なのにすばらしい商品を作っていてすごいと思いました。

ハンディキャップを持った方々が使いやすい商品を作ってもそこまで利益はないものなのに、作り続けると言う精神にとても感銘を受けました。

“様々な工夫をこらしてものをつくる”

すばらしいことだと思いました。これからもコラボという会社ですばらしい商品をつくり続けて下さい。応援しています。今日はとてもすてきなお話をどうもありがとうございました。聞けてとてもよかったです。

〇3年D組〇番

今回の授業では、会社の社長さんという普段あまり目にすることのない人の話を聞くことができた。今回の話を聞いていると、秋本さんがすごく楽しそうに話していた事に気づいた。ものを作り出すことが大変なことはよく分かるが、そこに楽しさを見だせれば、革新的なものを作り出せるのかな、と思った。今日の体験を今後に生かせればいいと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

大澤克美、仕事認識の育成をめざす小学校産業学習の検討、社会科教育研究、第 103 号、１頁～15 頁、2008 年、査読有り

〔図書〕（計　１件）

大澤克美、研究成果報告書、2009 年、1 頁～136 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

大澤　克美（OSAWA　KATSUMI）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：２０３２３７３５

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

田中　秀夫（TANAKA　HIDEO）
東京学芸大学・附属小金井中学校・教諭

平田　博嗣（HIRATA　HIROTSUGU）
東京学芸大学・附属小金井中学校・教諭

小倉勝登（OGURA　KATSUNORI）
東京学芸大学・附属小金井小学校・教諭